

もし、パラケル君が最初からいたら

あびゃー はびびびー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

完全にネタで思い付いた。適当な魔術。まあ、所長が強いので見た人はどうぞ。

目次

所長!?何やってんだよ所長!	1
ライドオ・・・(ルーン魔術)	3
待って、まだ、私、誰にも認められ	5
所長の発作	9
太陽傾き	12

所長!?!何やってんだよ所長!

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

もつとも詠唱に意味はないのだろうが、焦りと共に唱える。そして、現れたのは――「召喚により参上いたしました。どうか、このパラケルススと――」おそらくは、有名な錬金術師。だが、生憎口上を聞く時間はない。切羽詰まった状況、こう言う外ない。――「パラケルスス、俺達を助けてくれ!」

「――承知致しました。では、水よ――」

目の前の骨の軍勢が碎け散る。所長は何か言いたげに口を開こうとするが、安堵が勝ち、その場崩れ落ちた。

……「この時代にこんな物が?何故――」「パラケルスス?」「これはマスター。いえ、少々貴重な素材が手に入りました。何とすることもありませんが。」

――そうか。これは貴重なのか――と思いつつながら、50本程出す。たまたま拾っていたが、パラケルスス――所長の説明からすれば恐らくキャスター――に渡す。

「これは……!?!マスター、どこで?」

「拾ったんだよ。倒してる最中何もしないのもアレだろ?」

「……このマスター、活動的すぎでは?」

「ついでだ、これもあげるよ。」

「……これは、聖晶石! 鉱石科や降霊科ばかりが取り扱って居ましたが……これも?」

「うん、拾った――」

「マスター、貴方という人は……」

「立香――!何してるの!?!取り敢えずカルデアに通信繋ぐわよ――!」と、所長の声が聞こえる。「……パラケルスス、取り敢えず話はあとで、着いてきてくれる?」「ええ、分かりました。」

「……アナタ、パラケルススってとんでもないの呼んだわね。まあいいわ。もう驚き疲れたもの。」ピピー、と通信が繋がる音が聞こえ

る。神秘的とも言える機械的なこの場所で、所長が通信をする。

「―オルガマリーよ。そっちは？」

「―ピピ―、ロマニ・アーキマンです。」

「レフ、レフは何処？レフを出してちょうだい！」

―延々話を聞いていれば、

・レフさんがいないようだ。いい人そうだったのに残念だ。

・カルデアスタッフは殆ど焼け死んだ。… 残念というより、惨いといった感想が浮かぶ。何故そのような事をしたのか、よく分からない。

・そして今通信に出れるのはロマニくらいであり、他の上位マスター、スタッフは焼け死んだ。

… ほぼ全滅である。そして所長は―うそ。嘘よ、レフが死んだなんて―と言つて、慌てふためいた。

が、すぐに。「マスターが危篤？じゃあ―」と、すばやく采配をとつた。もしかしなくても、この人、有能ではないのだろうか。そもそもあんな100何十名を纏め上げる時点で相当有能である。

… これからは労つて、かつ話を聞いてあげるようにしよう。そう心に誓い、歩を進めるのであった。

ライドオ：：（ルーン魔術）

所長が先頭に、歩いていくと—黒い影が。「待つてください、マスタ—。もう一人います。」

「よし、パラケルスス。—じゃあもう一体を受けてくれ。キャスターだから厳しいかもしれないが—」

「確かに—私はキャスターです。しかし—いざとなればこれが—」

「わかった。じゃあ、頼む。」彼を信頼して、言う。

「ええ。では、罨を—」そう言うと、まず陣を描き始める。…何処と無く見たことがある、あれは火、あれは水—とその程度しか分からないが。

さて、「マシユ、—」「分かっています。逃走も難しい、なら—」「ああ、戦おう—」「ええ、突破です—」

異形の大腕を振り回し、かつ緻密に短剣を投げる。が—マシユには逆効果である。大盾でもって受けとめ、果敢にバツシユしていく。「マシユ、強化だ!」魔術、礼装の仕込み魔術だが、マシユに放つ。「っ!セヤアアア!」大声をあげ、殴る。殴打する。…先程のマシユとは思えない程だ。…!槍!?

「マシユ、避け—」「ご安心を。罨は設置しておきましたので。」「ガツ!?!な、何だこれは。ア!」。…魔方阵?から蔓が伸びる、いやこれは—岩石?まあとにかく、相手のサーヴァントを捉えた。沢山の槍、僧兵、そして、主武装の槍。—これは—「パラケルスス!あいつの脛を狙え!」

「!…ええ、承知致しました。」。…うわ、岩石で脛ガンガンやってくる、痛そう。…折れた!…あ、消えてった。

「ア、ランサーガ落ちタカ。ナラバ、セメテソノ隙二—」

「隙なんざねえよ。アンサズ!」

ボオン。と、爆発音が響いた。その先に居たのは—「ルーン魔術。青髪。ドルイド。つまり—」パラケルススは心当りがあるようだ。

「よう。助けに来たぜ。と言っても、もう遅いか。」

すると、所長が。「いえー助かりました。貴方は？」とすかさず聞く。「俺はキャスターでいい。あんたらこそーいや、余計な詮索はなしか。ところでー」何気なく、さりげなく。「俺と手を組んで、この聖杯戦争を終わらせねえか？」こちらに、手を組まないかと提案してきたのであった。

コホン、とパラケルススが咳をする。「ええ、私は承ります。ですがその場合のこちらのメリットと、そちらのメリットをお教えください。ー光の御子。」

すると、キャスターは、「チツ。真名が分かっただけなら俺が策略とか苦手なの知ってんだろ？とりあえず手を組みやあこの聖杯戦争は終わるし、そっちの戦力も増す。悪い話じゃねえと思うが？」

「… 所長？どうします？」

「分かったわよ、連れていってくれるんなら都合だし。＜… クーフリーンって… アルスター神話の英雄じゃない！何故こんなところ… いえ、そんなことより… >」

「ではその通りに。よろしくお願いしますね、克蘭の猛ー」

「あゝあゝ？」

「… いえ、失礼しました、光の御子。＜やはりこちらの貴方も… >」

… クーフリーンについて… 何か、知っているのだろうか… ?
そう思いを馳せながら、取り敢えず聖杯へ向けて進むのだった。

待って、まだ、私、誰にも認められ――

……と、まあ。ここまで濃厚に描写したのも、ある種の現実逃避である。俺は――キヤスターに、色々させ過ぎたのかもしれない。後悔したが、同時に思いだし、書き綴ろう――

……「立香！聖杯を回収するわよ！」

むしろ倒し素材回収に精を出していた俺こそ現を抜かしていたので、所長に声をかけられハツとする。即座に聖杯に向かうが――次の瞬間。

現れたのは――レフ。レフ＝ライノール――の姿をした、邪悪であった。

「ああ、レフ！レフ！」

待て、待って、待ってくれ、所長。明らかに悪人だし、何より怪しいだろ。確かに生きて嬉し。だが――明らかに、明らかに異常なのだ――。

……

「ああ、貴方だけが私を助けてくれた！今回もそうよね、助けてくれるのよね！」

「ああ、オルガマリィ、――」

正直、言葉も聞こえない。だけど、きつと今回も助けてくれるのだらう――きつと。

「オルガマリィ、君には失望したよ。」

――え？

「そうか、君は――」

うそ。分かっている？いや、うそ。そんなわけ――。

「そうだ、オルガマリィ。君に――」

そうか、私。わたしは。

「ああ――。でも、私――」

せめてもの抵抗と、反抗と、少しばかりの切望（ねがい）を込めて。力なく、それでも。声を振り絞って叫ぶ――

「いや、私。まだ、誰にも認められてない！こんなところで」

「パラケルスス。あれを、止めることはできるか？」

「ええ。私の、宝具を使えば。」

ならば―と、右腕に力を込める。たぎる血が魔力と同調する。

「令呪を以て命ずる―キャスター、宝具を開帳せよ！」

承知。と、呟くと、キャスターは懐からアゾット剣―とか言う、魔術用の短剣？を取り出す。

「真なるエーテルを導かん……我が妄念、我が想いの形――『元素使の魔剣』（ソード・オブ・パラケルスス）！」

やや高速で詠唱を済ませ、キャスターは魔術を解体する。同時に、神代のマナが、レフを貫く。

「が―サーヴァント風情が―!？」

……そして、俺は、思いついた。いや、思いついてしまった。肉体が無いなら作ればいいと。

「キャスター、ゴレム―いや、肉体を作れないか。所長は、肉体がない―故に滅びる。なら―作れば良い。」

「肉体を―作る？いや、私の魔術は、いえ―ですが―ええ。やって見せましょう。生憎、宝具の効果範囲内、なので。」

そう言う―と―凶骨でもって、肉体を組み上げる。ホムンクルスで肉体を作り上げる。そして―

「駄目です。核が、ありません。」

が、そこに。―提言する。

「聖晶石が、あるじゃないか。」

そう言う―と、ハツと、し。

「では、ここに。そして、こうすれば―火の元素、―彼女の、魔術回路は―いえ、ホムンクルスベビーを元にし、―。そして、」

着々と―組み上げる。

「り、つか―?」

オルガマリ―所長、優しく、案外頼りになる人だ。だからこそ、一人で抱え込んでしまったのだろう。だから―

「大丈夫です、所長。俺が、貴女を助けます。」

そう言うと、安堵の表情を浮かべ、ああ、良かったー。わたし、認められー。そう言って、目を閉じた。

「ええ、俺が。俺達が、認めます。」

パラケルスス！そう声をかけると、

「ええ、竜の牙を埋め込んで、少し虚栄の塵を練り込んで、弓や剣の輝石でマスター適性を増やし、とー。」

完成致しました、と、丁寧な声で。それでいて緊張した声で、キャスターが声を返す。

そりゃあそうだろう。自らの術が外法に使われるのがいやな様子だった。それどころか、過去に何かあったのか、人体錬成があるなら、とでも言わんばかりの表情だった。だから、キャスター、としてではなく、パラケルスス、として、声をかける。

「パラケルスス、ありがとう。何か過去にあったんだろうけどーそれでも、俺の為に、所長のために、人体を、錬成してくれて。作ってくれて、その力を振るつてくれてありがとう。」

「ー!!ええ、こちらこそありがとうございます。〈何せ、感謝の言葉を言われたのは少なく、〉」

「ーえつと、先輩?今のはー」

マシユが、話しかけてくる。

「ああ、所長が肉体がないっていったら?それだから、肉体を造った。」

「ーえ?えええ!!先輩、そんなー?先輩、魔術師だったのですか?そんなとんでもないことー」

「ああ、いや。パラケルススが。マシユ、大丈夫か?」

「え、ええ、むしろそんなのを聞いて、驚いているところですが、バイタル、メンタルともに異常ありません。〈とんでもない発想をしますね、いや私が知らないだけで外の魔術師や人はこういう発想をするのでしょうか...?〉」

「おーい、マシユー、マシユー。」

「大丈夫、おちついて、落ち着いてー。」

… どうやら上の空のようだが。その暇はないようだ。何せ。いや、一つ方法がある。

「マシユ、所長も逃げられない、そして次元も危ない。ここで逃げ出す方法が一つある。レフが開けた穴から逃げ出すんだ。いける—？」

「え、ええ。いけます。ですが—」

何か、問題でも？と聞く。すると—

「少々、狭く—」

なら、と。マシユを先頭に。そして、回復魔術を自分に。マシユに瞬間強化。そして、パラケルスス—

「パラケルスス、こつちに炎弾を打ち込んでくれ。あと、こつちに捕まってくれ。」

「—？え、ええ。分かりましたが。何故—？いや、いいでしょう。せいっ—」

緊急回避。そこで応用、飛び上がる。瞬間のダメージは応急処置で回復。そして、マシユ—、

「はい！せやああああ—」

そして飛び上がる。そのまま高度を維持、所長も捕まって（捕まえて）穴へ飛び込む。

・ー・

—全く、無茶な真似をするものだ。

自分が冒険をしたものでないから思うことかもしれないが、にしたって無茶だろう。まさかあそこで頭を打って倒れていたとは思わなんだ、まさに、奇想天外と言ったところだろう。と言うか—「な、何よこれ—!?」… 所長が封印指定にならないかが心配だ。

所長の発作

後日、所長のため―種火狩りをする事になった。というのも、ダ・ヴィンチちゃん曰―「残留思念だけで生き残ったから霊格が足りないんだよ。とりあえず新しい体になれるのも含めて、種火―まあ、英霊の霊格を満たすもの。そんなもの？」

長いが、こんなところである。だが―

「なんで、わたしが、こんなつこと！しくちやならないのよ！」

懸命に剣を、弓を振る、つがえる、断つ、射る―…いわゆる、貴族の令嬢、だからだろうか。こういうのには嗜み、経験や素養があるのだろう。それとも―

体に埋まった、その輝石のせいか。

「とりあえず、弓と剣の―」

…パラケル君、なんと石を埋め込んだのである。そのせいで、所長は、所長は―！

剣を、弓を、振らなきや、取らなきや落ち着かない体になってしまったんだ―！

「リツカ！あんたもボサツとしてないで手伝いなさいよっ！」

…語気も何処と無く強くなった気がする。…その目元は涙に塗れ潤っているようだ。

「はい！ガンド―！」

負けじと、魔力の弾を放つ。ちなみに、パラケルススの仕込みで―

「―！―！？」

…爆発する。簡単な火の魔術だからか、それともフロギストン、という原理だからか。案外簡単に使えた。ただし―イメージに固定されるのか、内側から爆発する。

「あ、危ないわよ！せめて水の魔術でも―」

が、すかさず文句が飛んでくる。下手なガンドより痛いどころか、不満が爆発しているようだ。

「先輩、周りの警戒も―！」

そういうと、マシユはすかさず、周りの竜牙兵も蹴散らす。―相変

わらずパワフルである。

「ヒツ!?レ、レーロマニ!誰かー!」

「…先輩。」「ああ。よし、瞬間強化—」

—バキツ。

「あ、ありがとう、キリエ—マシユ、リツカ。」

「いえ、所長こそ無事で?」

「ええ。なんとか—」

と、案外危険ながらに、トレーニングは終了した。

…

「…ふむ。なるほど、バイタルはこんな感じ、んで魔術回路は—なるほど。」

「ダ・ヴィンチ殿、いったい何を?」

—気取られたか、—ホムンクルス—

—不覚— —高神祕—

即座に脳内を整理する。そして—

「ああ、所長の体の調子がどうかと思つてね。君にも意見を聞きたいんだが…」

「—私にわかる範囲のことであれば何でも。彼女の可能性、または変更した点でしようか?」

「ああ。案外素直にに応じてくれるものだね?それで彼女の魔術回路のことなのだが—」

こうして、魔術の属性や起源の事について話し、夜は更けていく—
なんてね。まあ、大体理解した。

…

「おーい、所長—。所長—?」

「—そうよ。新しい体だからって張り切りすぎた—あー、筋肉痛、腱鞘炎—」

「…マツサージしましたよ?」

「—って、いや、起きるわ!ええ、大丈夫です。」

…
張りきりすぎて倒れているのでは?—というか、これは—特異点
解決より骨が折れるのではないだろうか。答案よりも数倍、数十倍厚

い。こんなものを—3分の1も終わらせてしまう所長は、やはり有能なのではないだろうか。

とかく—「ごはん、食べます?」

「ええ……ふう。」

食堂に向かう位の。気力は、あるようだ。

・

「ごちそうさま。さて—」

おいしく朝ごはんを食べ終わる、と—さて、剣を—!?

いけない、戦いを求めすぎている、落ち着け。落ち着け、わたし……サ—ヴァント—というには宝具もないけれど、宝具がないなりにサ—ヴァント並の戦闘力を手に入れたわたしである。戦う気力が余ってしまうのも仕方ないかもしれない。だが。

だが、わたしは魔術師なのだ。間違っても先頭で戦うような魔術師ではない。そんなもの、エルメロイか遠坂にでも任せておけばいいのだ。そもそも、でしゃばったわたしが—

「—長? 所長?」

「はっ! な、何でもないとわよ、何でも。」

「……特異点のことでも、思い出しました?」

—っ。そう。わたしの、私の、ターニングポイント。何より大事で、何より掃き捨てたい、そんな経験。ある意味、あそこ以上に思いを出した場所はないし、ある意味、一番意味のない体験だっただろう。そして—「君達には、本当に失望したよ。」「きみの大好きなカルデアスだ。」

—何より、トラウマの場所でもある。ただ—「俺が、俺達が、認めます。」と、誰かに、認められた場所でもある。そこは、少々複雑でもある。

ある意味、新しいわたしが始まった場所、ともいえるのかもしれない。けれど—

「……」

「……? あっ。」

この、書類は。当分、片付きそうにないけれど。

太陽傾き

…マジか。確かにそう思った。

「—そうだ、立香くん。属性を検査しておかないか？」
始まりは、ダ・ヴィンチちゃんのそんな一言だった。

「ええ。つと、…属性つて？」

「魔術を使うときの…いわゆる、炎の力で強化!とか、水の力で変化!とか、そういうものだよ。魔術における得意分野、属性。そんなものかな?」

「なるほど。じゃあ、お願いします。」

…「は?え、えーつと…ははははは!何だこれは!おーい、ロマニ!オルガマリー!来てくれ!」

…そう、この時点で何か嫌な—予感はしたのだ。だから、逃げようとしたのだ。しかし、前からロマニ。後ろから所長。これじゃ逃げられない。さて—

「属性は、面白いことがわかった。いや、本当支離滅裂になるくらい。とりあえずこれを見てくれ。」

そう差し出したのは、診断書を…。は?いや、軽くオカルトはかじってる。だからわかるが、いや、その通りとも限らないのだが、えーつと…

「風36本、虚30本、無22本、西18本。素質こそあるが、普通の魔術回路—しかし、特殊な属性が多いようだ。」

…西?いや、日の沈む、というか、寝付きは早いが、せいぜいその程度だろう。というか、それ以外に特に関連性が見当たらない。

「あ、アナタ…起源覚醒者!?どころか、虚無に風つて、ええ!?!きゆう…」

「マ、マリー!?ちよつ、メ、メデューツク!」

「医者様はロマニ、君の方、だよな?」

「はっ、そうだった、パラケルスス君も呼んで看護しよう!」

…騒がしいことだ。というか、一体どうということなのだ?とりあ

えずダ・ヴィンチちゃんに聞いてみよう。

「えーつと、ダ・ヴィンチちゃん、風とかまではわかるんだ、パラケルススから魔術を習ったから。でも、虚と無と西って?」

「ああ、虚と無は新しく、というより最近発見されたような元素なんだ。いわゆるダークマター、存在はするけどよくわからない、みたいな物として。そして、「西」だけど… 起源覚醒者、というのを知っているかい?」

「起源…? いや、知らない… です… が…」

「丁度いい、説明しよう。起源というのは、その人の在り方。本能、本質ともいえるね。その影響を受けて魔術回路が変質することもあるし、特殊能力に目覚めることもある… つまり、固有の本能的特性ともいえるね。」

…? つまり、本質は西と。なるほど… 朝起きるのが早いくらいしか思い付かない。もしくは。寝るのが早い、かもしれないけど。

「えーと、つまり?」

「知らない内に本能に目覚め、しまいにや貴重な人材ときた。妙なやつに捕まらないよう気をつけることだね。」

…このようなことである、ひどい。

…

…つまりフロギストンが扱えたのも虚無の聖と。なるほど。ふん、強化… 何だコレ。使っていたらコバルトの鉄パイプができた… 概念… 火に強いという謎の金属を思い浮かべたらこうなった。それどころか妖精的な力が宿っている… 取り返しのつかないことをしているのではないだろうか。では、次に。マッチ売りの少女でも具現化してしまおうかと思っただけの時。「藤丸君!」

…まさか、魔術師か何かに見つかって—「あー、僕ムニエルって言うんだけど、空想上のもので作れるんだよね?」

—想定外の来客だ。

…

…つい、オタク魂に火がついてしまったのだ。だから、つい—悪くない。なんて、言うつもりもないけどね! 「責任はこっちが取る、

ちよつと作って欲しいものがある。」

そう、ほんの、気の迷いなのだ。

「サーヴァントを作らないか？」

・ー・

「は？」

つい、そう口に出してしまった。何を言ってるんだ、この人は。いや、サーヴァントを作るなんてー

「いや、君のその魔術属性ならイケるんじゃないかと思つて。」

はあ…。ただ、話だけ聞いてみよう。

「いわゆる、サーヴァントになりきれない奴、つてのがいるんだ。多分。過去に未練が、認知に少ない、といった問題がある。そしてそれらは多分英霊と同じもんだ。なら、作れるんじゃないかと思つて。」

…。とんでもないことを言い出す人だが、いい話だ。一理…。なんとなくーなんとなく、やめた方がいいようなーいいか、乗った！

「よし、乗った、その話、乗らせてもらおう！」

「＜半ば、冗談だったんだが…。＞まあ、そう来たら作るか！」

・ー・

そうして、僕らは、辿り着いた。ある仮説に。成仏できない、座に行けない、英雄が、居ることを。

それからは早かった、まさに西の起源を發揮し、一気に活性化。日の沈みから陰陽を導き出し、急に、そして、簡単に、

頓挫した。いや、正確には、何故かよくわからないものができた…。何だコレ。

・ー・

…。何だコレ？…。女の人？…。凶骨を使ったのが悪いのだろうか。聖晶石を使ったのが悪いのだろうか。そして、出てきたのは。

「あーん枚。4まあい。」

ん？これ、もしかしておきー「あつ、割れちゃった！ひ、ひろつてくだらない？」

「—え？—えーつと、はい。どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。ああ、宝具が。」

… あつ、私（わたくし）、お菊と申します。サーヴァント、アサシ
ン。召喚に応じ、参上致しましたわ。」
—は？